

HiSEP 特別セミナー（7/3）資料 一部ずつお取り下さい。

### 古代文明がつたえるもの：アンデスの遺産

南米大陸には、かつてインカ帝国で知られるアンデス文明が栄えていた。しかし 16 世紀に渡来してきたスペイン人は、この地を征服してヨーロッパの植民地に変えてしまった。その後、19 世紀になってペルーやボリビアなどのラテンアメリカ諸国が独立し、近代国家への歩みを進めていくが、その一方で、かつて栄えた先住民の歴史はすっかり忘れられていった。

1911 年にアメリカの探検家ハイラム・ビンガムが、「インカ幻の都ビルカバンバ」を探索する途上で、とある山頂において、樹木に覆われていた古代都市の跡を発見した。今やペルーを代表する観光地となっている世界遺産マチュピチュである。しかし、この発見は当時のペルーでは、それほど関心を引かれることもなく、ただちにインカの歴史をよみがえらせることにはつながらなかった。



マチュピチュ遺跡

#### 文字なき文明

アンデスの文明は、世界の他の古代文明とはやや異なる特徴がある。世界の古代文明が生み出したさまざまな知識や技術は、文明同士の相互交流の中で広まり、後世へと伝えられていった。それらを継承し発展させてきたからこそ今日の文明がある。ところが、アンデスの場合には、他の世界と接触する唯一の機会が 16 世紀のスペイン人の到来であったが、それは一方的な征服という不幸な結末で終わってしまった。インカ帝国は、現在のペルーとボリビアを中心に、エクアドル、チリなどの国々にまたがる広大な領土を支配していた大国家であったが、文字を使用することはなかった。自らの事績や歴史を書き残すことがなかったのである。

それでは、他のいかなる文明とも交流を持たず、文字によって後世に伝承することもできなかったアンデスの先史文明は現代のわれわれに何も残さず、何も伝えることなく消滅してしまったのだろうか。一般にはあまり知られていないが、この文明が産み出したジャガイモ、サツマイモ、ピーナツ、トウガラシなど数多くの作物は、征服者スペイン人の手で、結果としては世界中に広まり、今日の世界の食糧事情に多大な貢献をしている。アンデスの文明は自らの知識や技術を伝えるすべも機会もなかったが、たしかに具体的な物として今日まで伝えられている。作物だけではない。インカ帝国は征服され、アンデス文明は歴史から抹消されていったが、遺跡や遺物は残った。埋もれた遺跡を発見し、それ自体

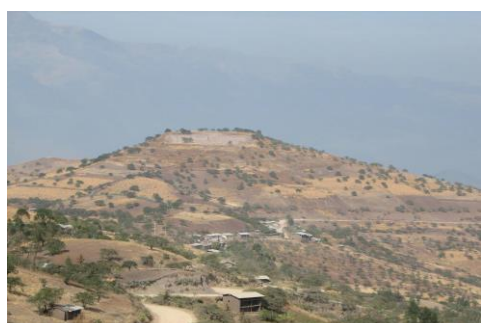
は語ることもない事物から、過去の文明の営みを読み取る学問が考古学である。ただし、マチュピチュが発見された 20 世紀はじめには、考古学はまだ黎明期にあった。アンデスの遺跡として名高い「ナスカの地上絵」の場合にも、1930 年代に上空を飛んだ航空機のパイロットによって偶然に発見されたが、何も語らない不思議な地上絵は多くの謎だけをもたらした。遺跡の中に埋もれた古代の情報を考古学が引き出すことができるようになるのは 20 世紀後半になってからのことであった。

## 遺跡の発掘調査

失われたアンデスの先史文明に光をあてる考古学の研究には、日本人も少なからぬ貢献をしてきた。1958 年に東京大学が行った最初のアンデス遺跡調査から数えれば、すでに半世紀が経過している。1960 年にコトシュ遺跡で発見した神殿は土器製作が開始される以前の紀元前 2000 年にさかのぼるもので、当時の常識を大きく覆す最古の神殿として国際的に大きな注目を集め、その後のアンデス文明の起源を辿る研究のさきがけとなっている。

16 世紀のインカ帝国征服によって途絶えたアンデス文明の伝統は、今は、紀元前 3000 年まで遡ることが判明し、実に 4500 年もの歴史があったことがわかり始めている。

私自身がペルーの遺跡発掘調査に携わるようになったのは 1975 年である。その後、幾つかの発掘を手がけ、1988 年にクントゥル・ワシ神殿の発掘を開始した。この遺跡では重要な学術的発見が相次ぎ発掘はほぼ毎年のように 12 回にわたって続けられた。関連する遺跡の調査や、出土した遺物の分析などを含めれば約 20 年間の歳月を要する予想外の大規模な調査研究となった。成果のとりまとめがようやく一段落したのは 2006 年のことである。



クントゥル・ワシ遺跡の遠景

クントゥル・ワシ神殿遺跡はペルーの北部山地、標高 2300 メートルの小高い丘の上にある。今から 3000 年も前に築かれた大規模な神殿である。アンデスの初期文明の発展は独特な形をとって、神殿が社会統合の中心をなしていた。大河流域の広い平野部において農業が発達し、都市を中心とした大きな国家ができあがるという一般的な古代文明のイメージとはかなり異なる展開になっている。

クントゥル・ワシ神殿は険しいアンデスの山中にあり、周囲に大きな人口を支えるような広い農地はなく、都市のような大きな居住の跡も見当たらない。当時の人々は都市を形成せず、神殿から離れた別の場所に分散して住んでいた。神殿は、周辺の各地から折にふれて人々が集い、交流する場であった。このような神殿では土器や石製品など多くの工芸品が製作され、人々に供給されていった。当時の最先端の知識と技術が神殿に集積され、それは集まってくる人々によって各地に伝えられ、広まっていった。

初期アンデス独特の神殿文明は少なくとも 1000 年以上も続き、各地で壮大な神殿が建て

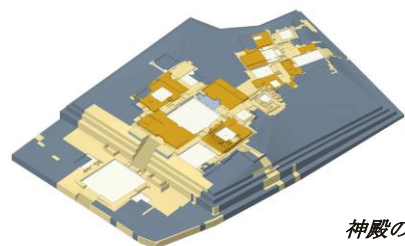
られ表現力豊かな工芸品の数々が生み出されていったが、このような神殿を核とする社会が国家へ発展することはなかった。アンデスで最初の国家が登場するのは 3 世紀以降であり、各地で神殿が放棄された時期とは数 100 年の隔りがある。

### クントゥル・ワシ神殿

クントゥル・ワシ神殿の中心をなすのは幅 100m、奥行き 160m、高さ 8m 余の中央基壇であり、大型の石を組み合わせた巨大な壁によって支えられていた。この大基壇の上には数多くの建物が築かれている。神殿建築の表面は白い漆喰で塗られ、ときには多彩色の壁画が描かれ、レリーフ像などで飾られていた。また、大小さまざまな広場が設けられ見事な出来ばえの石彫が各所に配置されていた。中央基壇の前方には数百メートルにわたって段差のある幾つものテラスが展開しており、神殿域は大きな広がりを持っていた。



クントゥル・ワシ神殿の正面



神殿の復元図



石彫



彩色土製レリーフ

発掘を始める前のクントゥル・ワシ遺跡の神殿建築はすべて地中に埋まっており、見たところは土の丘にすぎない。しかし、地表下には数多くの建物が重なるように埋まっていた。神殿建築は時がたつと修復されていくが、ある程度の時間が経つと大規模な増改築が繰り返し行われた点に特徴がある。これをわれわれは神殿更新と呼んでいる。建物の全面改築ではない。そこを捨てて、別の場所に新しい神殿を建て直すわけでもない。古い建物をそのまま埋めてしまうのである。取り壊して更地にするのではなく、土砂を積み上げて埋めてしまい、その上に新しい建物を築いた。そのため古い神殿は地中に残され、上に次々と新しい神殿が重なっていく。つまりクントゥル・ワシ遺跡で掘り出したのは一つの神殿建築ではなく、前 950 年から前 250 年まで 700 年間にわたって繰り返し造りかえられていったさまざまな時期の神殿の跡であった。

調査は最後の時期の神殿から、より古い神殿へと少しずつ進められていく。こうして、ある時期の神殿がどのような状態で埋められ、次の建物がどのように造られていったかがわかる。また土砂の中には人々が廃棄し、埋めた工芸品の数々も含まれていた。工芸品も時期によって違いがある。クントゥル・ワシ遺跡の発掘調査では、当時の人々がこの場所で行った活動の様子をとらえることができ、それが数百年の時間の経過とともにどのように変化していったのかを具体的にあきらかにすることができた。

## 神殿更新

クントゥル・ワシ神殿では六回の更新が行われていた。とくに規模の大きなものは二回で、それを区切りにしてイドロ期、クントゥル・ワシ期、コパ期の三時期に大別することができた。

前 950 年に建てられたイドロ期の神殿は、それほど大規模なものではなく、神殿域の広がりも限られていた。周辺地域の比較的小さな社会の核として機能していたと考えられる。この神殿は少なくとも一度は更新され、より洗練された神殿になっていった。

前 800 年ごろに行われた神殿更新は、もっとも大がかりなものであった。古いイドロ期の神殿は土砂によってことごとく埋められ、その上にまったく新しいタイプのクントゥル・ワシ期の神殿が建立された。このとき、埋める前の古い神殿建築の床下に穴を掘って墓が造られ、遺骸とともに金製品をはじめ装飾土器などの見事な工芸品が数多く納められた。これは神殿更新に伴う儀式としての特別な埋葬であったと考えられる。これらの金製品はアンデスの遺跡から発見された最古の例であったが、その造形表現や技法などはきわめて高度な水準にあった。神殿更新に特別な埋葬が伴うのは、それ以降にもしばしば繰り返された特徴である。われわれは金製品を含む墓だけでも八基を発見しており、金製品の総点数は二百点を超える。



墓の副葬品



金製大型耳飾り

クントゥル・ワシ期の神殿は、規模が比べものにならないほど大きくなっただけではなく、工芸品にも新しい技法が多く取り入れられ、大きな社会的転換があったことを示している。クントゥル・ワシ期の大神殿は少なくとも前の時期から連続して発展したとは考えにくい。地域社会の内的発展ではなく、より広い外界の動きの中で成立したと見ることができる。

この時期には金製品、黒曜石、ソーダライト、硫化水銀（朱）など産地が限られ希少性の高い物質が多く使用されていた。いずれも近辺では入手できない遠隔地の産物である。遠くエクアドルの沿岸部にしか棲息しない特別な貝スポンディルスを使った装身具なども確認された。クントゥル・ワシ期の大神殿はアンデスの多様な環境の中にある多くの地域社会を一つのネットワークで結ぶ広域社会の核として機能していたのである。

この広域型神殿は、前 500 年頃の大規模更新によって、大きな変貌を遂げた。このコパ期の神殿は前のクントゥル・ワシ期の建築構造を踏襲している面もあるが、新しいプランがかなり取り入れられていた。なにより大きく変化したのは資源利用のあり方で、前の時期に顕著に見られた広域性が急激に薄らいでいる。工芸品においても前時期のものとははっきりとした違いを示していた。クントゥル・ワシは、再び地域社会の核としての神殿に戻ったのである。ただし、以前のイドロ期に比べれば、その範囲はずっと広がっていた。そして神殿の改修や増改築は、全時期を通じて、もっとも頻繁に行われており、工芸品などの生産量も、この時期がもっとも多かった。つまり神殿の活動はもっとも活発になったのである。

しかし、コパ期に起こった二回目の神殿更新において、神殿の構造は大きく変質していった。それはあきらかに神殿の機能に変化が生じたことを示唆している。そして前 250 年には、クントゥル・ワシの神殿は放棄されてしまった。

このように、遺跡の発掘調査からは古代アンデス独特の文明展開の歴史を読み解くことができるのである。

## 古代の神殿がつたえるもの

ところで先史アンデスの人々は、なぜ壮大な神殿を築き、そこに色鮮やかな壁画やレリーフを飾り、大きな石に怪奇な像を刻んだのだろうか。神殿は何らかのメッセージを視覚的に伝える壮大な装置であったと考えられる。

文字のない先史アンデス社会では、人々は神殿に集約的に表現された様々な図像から情報を受け取っていた。また、先史アンデスの神殿では精緻な装飾土器や石製品など当時の技術の粋をこらした工芸品が製作されていた。そこにも、やはり象徴化され、様式化された図像表現が数多く認められる。持ち運びのできる工芸品は、



金冠

各地にメッセージを伝達していく有効な媒体であったに違いない。そのように考えれば、かつて神殿が伝えようとしたメッセージは掘り出された神殿や工芸品としてわれわれにも伝えられているのである。

## 現代の神殿

神殿が過去において伝えようとしたメッセージの解読はまだ終わっていない。しかし遺跡はわれわれに別のことも伝えている。

クントウル・ワシ神殿の存在は、この場所がかつて広いアンデス地域全体の重要な中心地であり、人々がここに惹きつけられ、700年にもわたって繰り返し神殿を更新し、その求心力を高めていったことを示している。

今、遺跡の近くにある村は現代国家ペルーのまさに辺境の地にあり、外部から訪れる人もほとんどいない状況にある。かつて、ここに知識や情報が集まり、また発信していったことを考えるとあまりにも大きな違いである。なぜクントウル・ワシ神殿は繁栄したのだろうか、その点を学びとる必要がある。

最古の金製品の発見などでクントウル・ワシ遺跡は国内外でおおいに注目された。地元の人々は、これを一時的なブームで終わらせず観光資源としてクントウル・ワシ神殿をきちんと復興させ、それを核に村を活性化させようと考えたのである。



クントウル・ワシ博物館

人々が訪れてきたとき、そこに見るべき物があり、何かきちんと伝えられることが重要で、それがまさにかつての神殿の機能であった。そこで現地の村に、遺跡から出土した金製品を始めとするさまざまな工芸品を展示するための博物館を建設することにした。

遺跡も正面部分と主要建築の修復保全措置を施し、今は、誰でもかつての神殿の威容を見ることができるようになった。

最初の動きからは、すでに20年近くが経過した。われわれは、学術的アドバイスや資金集めで全面的に協力したが、遺跡を管理し、博物館を実際に運営しているのは村人たちである。そして、今、忘れ去られたようなアンデス山中にも観光客が訪れてくるようになった。この場所が再び人々の注目を集めるようになり、それに応じて、村は活性化した。まさにクントウル・ワシ神殿は甦ったのである。

(加藤 泰建)